

保育所実習における学生の自己評価からみた実習指導内容の検討

—大学・短期大学学生の評価結果の分析を通して—

山田 朋子¹⁾ 那須 信樹²⁾ 森田 真紀子¹⁾

The Examination of the Training Guidance Contents From Student Self-Evaluation at Day Nursery School Training: Through the Analysis of Self-Evaluation by University and Junior College Students

Tomoko Yamada¹⁾ Nobuki Nasu²⁾ Makiko Morita¹⁾

(2009年11月27日受理)

1 はじめに—問題の所在—

1) 保育士の質向上と保育所実習指導の質保障

2008(平成20)年3月に改定された現行の『保育所保育指針』であるが、その背景には保育所の社会的役割として期待される数多くの今日の課題が存在する。中でも保育士の資質向上について、「保育所は、質の高い保育を展開するため、絶えず、一人ひとりの職員についての資質向上及び職員全員の専門性の向上を図るよう努めなければならない」(第7章)と明記されるに至った。専門性の向上を図りながら、保育士自身が「反省的実践家」として自らの保育を「振り返る」姿勢、「学び続ける」姿勢を育むための保育士養成カリキュラムの検討¹⁾、とりわけ自らの保育士としての適性を問う場ともなる保育所実習(指導)の充実は、養成校に求められる社会的要請であり、公教育機関としての養成校の責務である。もはや、養成校と保育所は組織的かつ協働的な関係づくりの中で、質の高い保育士養成を目指していくという社会的な負託に応えていかなければならない。

さて、保育所実習においては、2003(平成15)年12月に技術的指導として発出された「厚生労働省雇用均等・児童家庭局長通知『指定保育士養成施設

の指定および運営の基準について』(以下、「局長通知」と略す)に示された「保育実習実施基準」に基づく実習指導を展開しなければならない。保育所実習の実施基準および教授内容は、「局長通知」の別紙2、別紙3(巻末資料A参照)によって示される通りである。一見してわかるように、そこに示された内容はあくまでも「標準的」な指導項目であり、具体性には欠けるものである。

このことは結果的に各養成校の「独自性」や「特色」の名のもと、共有すべき内容や基準も意識しないままに、各実習担当者が有する異なる専門性を背景とした実習指導の展開といった状況を生み出している。この状況は、近年、実習生を引き受ける保育所側の混乱を招いており、同じ国家資格としての保育士を養成する養成校間に格差をもたらしているとも言われている²⁾。

2) 「共通語」としての「保育実習指導のミニマムスタンダード」の存在

これらの問題を改善していくために、(社)全国保育士養成協議会の専門委員会は3カ年にわたり全国の保育士養成校を対象とした保育実習指導の実態調査を行っている³⁾。その集大成として提起されたものが、「保育実習実施基準」に示された内容を

別刷請求先：山田朋子，中村学園大学人間発達学部，〒814-0198 福岡市城南区別府 5-7-1

E-mail：toyamada@nakamura-u.ac.jp

1) 中村学園大学人間発達学部 2) 中村学園大学短期大学部幼児保育学科

¹⁾ 全国保育士養成協議会専門委員会は、「反省的実践家」としての保育士像を念頭に置いた在学中の学生の成長イメージを手がかりとしながら養成カリキュラムのシークエンスの検討を行っている。全国保育士養成協議会編『保育士養成システムのパラダイム転換Ⅱ—養成課程のシークエンスの検討—』保育士養成資料集第46号，p.67，2007。

²⁾ 平成20年度の全国保育士養成セミナーならびに平成21年度の全国保育士養成協議会九州ブロックセミナー等の保育所実習関連分科会における問題提起をはじめ、実習施設からの指摘も存在する。

³⁾ 全国保育士養成協議会専門委員会編『効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅰ～Ⅲ』保育士養成資料集第36号(2002)・同40号(2004)・同42号(2005)。

ベースに策定された『保育実習指導のミニマムスタンダード』(2005)⁴(以下、MSと略す)である。

MSは、厚生労働省が提示している「保育実習の目的」あるいは「保育実習指導(1単位)」のねらいおよび内容を意識しながら、養成校として学生に実習前、実習後に指導しておきたい標準的な事項で構成されたものである。MSの登場は、各養成校ベースの保育所実習指導の展開から、真に国家資格取得に求められる保育所実習指導への新展開を期待する実習指導担当者の声として、養成校間の協働的な取り組みへのシフトチェンジを後押しする動きへとつながってきている。このことは、近年の保育士養成校の量的拡大が激しさを増す中で、実習指導のクオリティを高める「共通語」としての価値が見出され始めているからであると考えられる。

3) 自己評価から実習指導の深化を図る

上述してきたMSには、事後指導の小項目として「自己評価を行わせ評価の“ずれ”を検討させる。」とある。学生が、自らの保育所実習を振り返り、自己評価するという行為はきわめて重要であるが、そのことが本当に学生にとって意味ある活動となるためにどのような視点が必要なのであろうか。意味ある活動とするためにも、自己評価の基礎となる視点、すなわち実習評価票に配置される評価項目について検討することは、実習の事前・事後指導内容の検討にも通じることであり、学生を主体とした今後の実習指導のあり方を模索していく上でも非常に重要な視点となりうる。

これまで、さまざまな養成校独自のアプローチによる学生の自己評価に関する研究⁵は実施されてきたが、MSベースの評価票を活かした自己評価についての研究はいまだ少ない。そこで本稿では、次

の3つの視点から、保育所実習指導の質的保障を中心的なテーマに据えながら、MSベースの実習指導内容の精選と構造化を主たる目的として検討を行うものである。

- ①「本学独自の評価票」による実習施設と自己評価結果の平均値の比較(表1)
- ②「本学独自の評価票」と「MSベースの評価票」(以下、「MS評価票」と略す)の自己評価票様式に関する意識の変化(表2)
- ③「MS評価票」による4年制学生と2年制学生の自己評価結果の比較(表3)

2. N大学ならびにN大学短期大学部における実習評価の現状と課題

1) N大学の実習の流れ

N大学(以下、本学と略す)では、幼稚園教諭一種免許状および保育士登録資格取得が可能である。学生の9割が両方の資格習得を目指している。関連する実習をすべて履修すると、3年次6月の「付属幼稚園教育実習」、同8月「保育所実習A」⁶、同3月「保育所実習B」⁷、4年次6月の「施設実習」、同9月「外部幼稚園教育実習」という流れとなる。

1) - 2 N大学短期大学部の実習の流れ

N大学短期大学部(以下、短期大学部と略す)では、幼稚園教諭二種免許状および保育士登録資格取得が可能である。学生の9割が両方の資格習得を目指している。関連する実習をすべて履修すると、1年次2月の「保育所実習A」⁶、同2月「保育所実習B」⁷、2年次6月の「前期外部幼稚園教育実習」、同8月「施設実習」、同10月「後期外部幼稚園教育実習」という流れとなる。

⁴ 全国保育士養成協議会専門委員会編『効果的な保育実習のあり方に関する研究Ⅲ－保育実習指導のミニマムスタンダード－』保育士養成資料集第42号、2005。

⁵ ①佐野美奈「保育所実習(保育実習Ⅰ)における実習評価に関する一考察－保育評価と自己評価の比較分析を通して」大阪松陰女子大学研究紀要第7号、pp.131-147、2008。

②松岡学「教育実習・保育実習における学生自己評価と幼稚園評価・保育所評価の比較考察」国際学院埼玉短期大学研究紀要第28号、pp.63-72、2007。

③亀井聡「施設実習における自己評価と施設評価の比較」全国保育士養成協議会第47回研究大会研究発表論文集、pp.72-73、2008。

④河野淳子他「保育実習(施設)の現状に関する調査Ⅱ-(2)～ミニマムスタンダードを用いた実習指導内容についての全国調査：養成校編～」全国保育士養成協議会第47回研究大会研究発表論文集、pp.210-211、2008。

⁶ 「保育所実習A」とは、「児童福祉法施行規則」第6条の2第1項第3号の「指定保育士養成施設の修業教科目及び単位並びに履修方法」の別表第1に示される修業科目「保育実習」(実習・5単位)に示される実習のうち、「保育所」での実習に該当するものをさす。

⁷ 「保育所実習B」とは、「児童福祉法施行規則」第6条の2第1項第3号の「指定保育士養成施設の修業教科目及び単位並びに履修方法」の別表第2に示される選択必修科目に示される「保育実習Ⅱ」(実習・2単位)において選択習得することが定められた「保育所における実習」をさす。

2) N大学のMS評価票移行への経緯

MS対応の実習指導用テキストの発刊⁸などに見られるように、ここ数年でMSを参考にした実習指導を展開する養成校は増えてきている。本学と同法人による運営がなされている短期大学部においては、MSベースによる保育所実習指導の取組みが3年目を迎え、MS評価票をもとにした学生の実習課題やその改善に向けた取組みのあり方について、新展開に向けた検証の時を迎えている⁹。

一方、本学においては、大学独自の、いわゆるスクールスタンダード的な保育実習指導を展開してきた。これまでの卒業生に対する実習施設の評価は概ねよく、就職率も高い水準であることから、特に実習指導内容の改善に向けた取組みの必要性などに関心を持つことはなかった。しかし、今般の保育所保育指針の改定により、時代が要請する保育士への期待や保育士の資質向上にむけた流れの中であって、本学独自の実習指導では不十分な状況も表出してくるようになった。実社会における保育士の高い専門性への期待がある反面、生活体験の乏しい学生が引き起こしている様々な不適応状態に、保育士養成校教員のジレンマは高まるばかりである。「あれもこれも教えておく必要があるが、学生は今でも消化不良を起こしている実態がある」、教員としての悩みは増すばかりである。

さて、評価票には、毎年継続することで自校の学生の「実習生としての質」の変化を多面的かつ定量的にデータとして捉えることが可能になるという価値がある。さらに、MSの評価票への移行は、他養成校と実習指導に対する共通認識を持つことによる「高等教育の方向性としての質の高い競争環境」(2009. 那須)を作ることもつながる。そのような環境の中でこそ、より客観的に自校の実習指導の現状を把握できると考えられる。他校との比較や格づけになるとの指摘もあるが、そこには実習指導に携わる様々な当事者間の具体的なコミュニケーションが生み出される可能性が高い。このように、MS評価票の活用は、実習指導に係る問題を実習担当者だけの問題としてとどめず、各教科担当者の具体的な授業内容改善にもつながる重要な契機をも含

むものとして位置づけられることになる。

3. 方法

「はじめに」の部分でも述べたように、本稿では、①「本学独自の評価票の特徴を実習施設の評価と自己評価結果の比較から検討を加えること」、②「学生が本学独自の評価票とMS評価票の様式の違いを自己評価の観点からどのように捉えるか、意識の変化から比較・検討を加えること」、③「養成年限の特徴を見出すために、MS評価票での自己評価を4年制学生(110名)と2年制学生(218名)の評価結果から比較・検討を加える」ことを中心に、実習指導内容の検討を行う。

4. 結果と考察

本学独自の評価票(資料B参照)構成は6項目からなり、5件法による回答を行う。

1) 「本学独自の評価票」による実習施設と自己評価結果の平均値の比較(表1)

(1) 実習施設の評価が高く、自己評価が低い項目

保育所実習A・B共に「③研究の態度および教材に関して」については、学生本人の振り返りからクラスの子どもの発達状況や時期に即した保育内容について十分に理解できたと評価したことが考えられる。「⑥資質・適性について」については、保育所実習Aの実習施設の評価の平均値が高く、実習生の育ちに対する期待が表わされていると考えられる。また、保育所実習A・Bどちらも「②乳幼児に対する愛情と理解について」の項目以外は、自己評価よりも実習施設の評価の平均値が高く、学生が実習についてより厳しい基準で振り返りを行っていることが伺える。

(2) 実習施設の評価が低く、自己評価が高い項目

保育所実習A・B共に「②乳幼児に対する愛情と理解について」の自己評価が高い。この項目には、「愛情」と「理解」の2つの観点があり、学生は「愛情」に、実習施設は「乳幼児理解」に着目した

⁸ 相浦雅子・那須信樹・原孝成編著『STEP UP! ワークシートで学ぶ保育所実習1・2・3』, 同文書院, 2008。

⁹ 那須信樹・竹内理恵・山田朋子・森田真紀子「『保育実習指導のミニマムスタンダード』の新展開に向けた課題の検討—学生の実習評価の分析を中心に—」中村学園大学・中村学園大学短期大学部研究紀要第41号, pp.107-119, 2009。

ことによる評価結果だと考えられる。「愛情を持って接した」とする学生に対して、実習施設は「愛情を持っていても、乳幼児の発達段階を理解したとは言えない」とする両者の基準のずれではないかと考えられる。捉え方が評価者の立場で曖昧にならない項目内容（表記）の検討が必要である。

(3) 本学独自の評価票の特徴

自己評価では、4項目について保育所実習B評価が若干高い。本学独自の評価票は、同一様式で保育所実習A・Bを比較するため、学生自身が自らの成長度合いを同じ視点で比較しやすいといえる。自己評価が低い項目「①勤務態度に関して」は、健康に対する自己管理課題が、また「⑤実習日誌に関して」はその記載内容の精選について、自己課題が見えてきたのであろう。

実習施設の評価では、「②乳幼児に対する愛情と理解について」「④保育指導の実際に関して」において保育所実習Bが高い。「実習生として」の取り組み指導力が認められたのであろう。残りの4項目は保育所実習Bで下がっている。一人の学生が同一園で連続して実習を実施しないため単純比較はできないが、保育所実習Bの学生について、実習施設

は保育所実習Aより評価基準を厳しくする傾向にあることが推察できる。

2) 「本学独自の評価票」と「MS評価票」の自己評価票様式に関する意識の変化(表2)

保育所実習AのMS評価票(資料C-1)と保育所実習BのMS評価票(資料C-2)の「態度項目」は同様である。表2の通り、保育所実習Aでは本学独自の評価票様式による自己評価を支持する学生が33.6%、MS評価票様式による自己評価を支持する学生が30%と若干、本学独自の評価票様式への支持が多い。しかし、保育所実習Bになると、本学独自の評価票による自己評価を支持する学生が17.3%、MS評価票様式による自己評価を支持する学生が47.3%へと大きく変化が見られた。実習施設よりも厳しい自己評価をした学生が、自由記述の中で、「具体的で細かな項目から、実習段階を追った目標が分かる」「振り返りや自分の足りないところに気づける」「自分の成長につなげられる」などの理由を挙げているように、実習生として自己課題や段階を追った目標を見いだす必要性を感じ、MS評価票による自己評価様式を支持したことに、大きな意味を見いだせる。

表1. 「本学独自の評価票」による実習施設と自己評価結果の平均値の比較

	保育所実習A		保育所実習B	
	自己評価平均	実習施設の評価平均	自己評価平均	実習施設の評価平均
①勤務態度に関して	4.04	4.42	3.96	4.39
②乳幼児に対する愛情と理解に関して	3.98	3.40	4.01	3.91
③研究の態度および教材研究に関して	3.09	3.85	3.31	3.83
④保育指導の実際に関して	3.09	3.27	3.15	3.65
⑤実習日誌に関して	3.58	4.00	3.55	3.93
⑥資質・適正に関して	3.33	4.12	3.45	4.06

表2. 「本学独自の評価票」と「MS評価票」の自己評価票様式に関する意識の変化

保育所実習A	支持	保育所実習B	支持	変 化	
本学独自の評価票	37人 (33.6%)	本学独自の評価票	19人 (17.3%)	本学独自の評価票→本学独自の評価票	11人 (10.0%)
				MS評価票→本学独自の評価票	8人 (7.3%)
MS評価票	33人 (30.0%)	MS評価票	52人 (47.3%)	MS評価票→MS評価票	25人 (22.7%)
				本学独自の評価票→MS評価票	26人 (23.6%)
無回答	40人 (36.4%)	無回答	39人 (35.5%)	無回答→MS評価票	1人 (0.9%)
				無回答→無回答	39人 (35.5%)

3) 「MS 評価票」による4年制学生と2年制学生の自己評価結果の比較(表3)

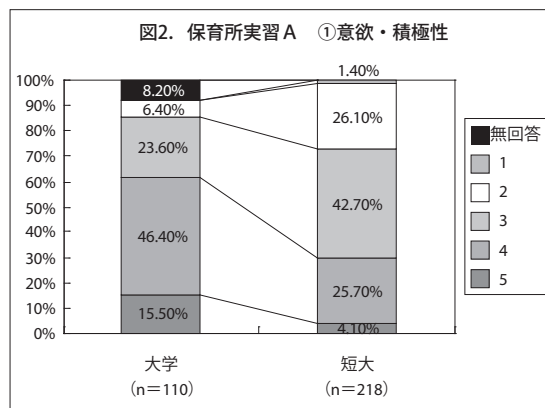
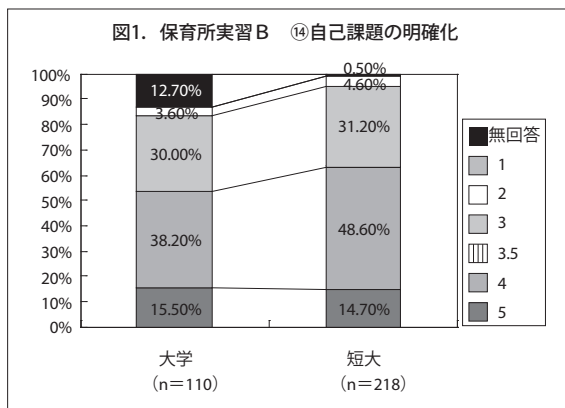
次に、4年制学生と2年制学生による自己評価結果の比較表を提示する。

(1) 4年制学生の自己評価が低く、2年制学生が高い項目(図1)

2年制学生の自己評価が高い項目の、保育所実習B「⑭自己課題の明確化(図1)」から一人の学生が同一園で連続した実習を実施することにより、時間をかけて自己課題をより明確にするメリットが挙

表3. 「MS評価票」による4年制学生と2年制学生の自己評価結果の比較

保育所実習 A				保育所実習 B			
4年制学生		2年制学生		4年制学生		2年制学生	
⑪家庭・地域社会との連携	2.88	⑪家庭・地域社会との連携	2.36	⑪地域社会との連携	2.68	⑪地域社会との連携	2.24
⑧保育計画・指導計画の理解	3.04	⑧保育計画・指導計画の理解	2.62	⑩保護者とのかわり	2.83	⑧指導計画立案と実施	2.46
⑬保育士の倫理観	3.22	⑨保育技術の習得	2.83	⑤保育技術の展開	2.96	⑩保護者とのかわり	2.61
⑨保育技術の習得	3.25	⑬保育士の倫理観	2.84	⑧指導計画立案と実施	3.00	⑤保育技術の展開	2.88
⑦乳幼児の発達の理解	3.26	⑦乳幼児の発達の理解	2.92	⑬保育士の職業倫理	3.22	⑬保育士の職業倫理	2.91
④協調性	3.41	①意欲・積極性	3.05	⑫チームワークの実践	3.30	⑦子どもの最善の利益	2.98
③探究心	3.41	③探究心	3.08	⑦子どもの最善の利益	3.38	⑫チームワークの実践	3.08
⑤施設の理解	3.53	②責任感	3.18	③探究心	3.46	⑨記録	3.23
⑩チームワークの理解	3.67	④協調性	3.23	⑨記録	3.50	③探究心	3.33
②責任感	3.72	⑭健康・安全への配慮	3.25	⑥一人一人の子どもへの対応	3.60	②責任感	3.37
①意欲・積極性	3.77	⑩チームワークの理解	3.32	②責任感	3.63	⑥一人一人の子どもへの対応	3.44
⑭健康・安全への配慮	3.82	⑤施設の理解	3.39	①意欲・積極性	3.69	①意欲・積極性	3.63
⑥一日の流れの理解	3.92	⑥一日の流れの理解	3.63	⑭自己課題の明確化	3.75	④協調性	3.47
⑫子どもとのかわり	4.20	⑫子どもとのかわり	3.82	④協調性	3.88	⑭自己課題の明確化	4.10



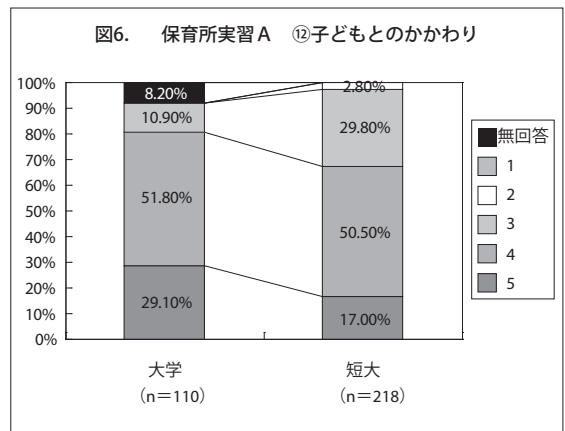
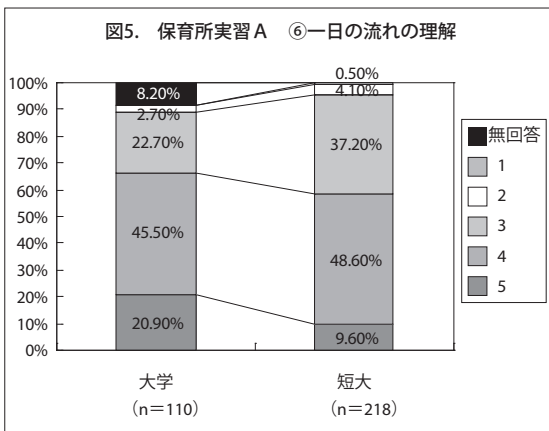
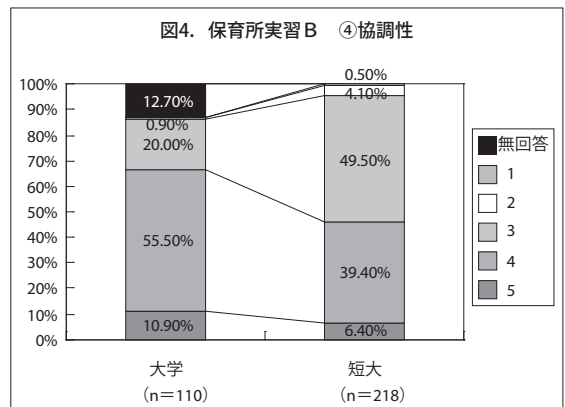
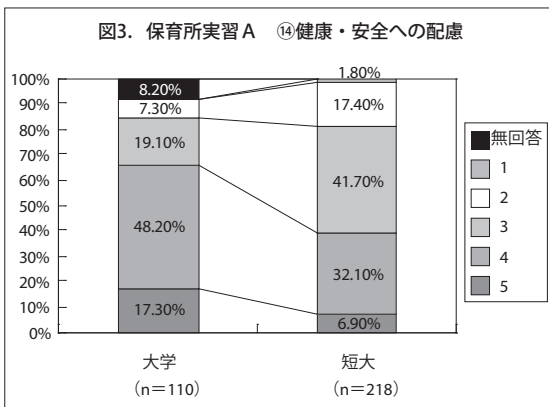
げられる¹⁰。一方、保育所実習Aの事後指導の時間確保は難しく、保育所実習Bの目的へ課題移行しにくいことが考えられる。

(2) 4年制学生の自己評価が高く、2年制学生が低い項目(図2～図6)

保育所実習Bでの「⑭自己課題の明確化」についての評価結果以外は、4年制学生の自己評価が高い。「A①意欲・積極性」(図2)、「A⑭健康・安全への配慮」(図3)、「B④協調性」(図4)の3項目は、4や5評価をつけた2年制学生が30%に対し、4年制学生では60%を超えている。4年制学生は大学生活の中での自ら学びとる姿勢、付属幼稚園教育実習でのグループ学習型実習、サークル、ボランティア、アルバイト等の社会経験を通じて、広い視野でのゆとりが持てたと考えられる。また「A⑥

一日の流れの理解」(図5)、「A⑫子どもとのかかわり」(図6)の2項目について4や5評価の学生が2年制学生は50%台、4年制学生では約70%強と評価が高い。

同じ保育所実習Aであっても、2年制学生が1年次2月に初めて実施する保育所実習Aと、4年制学生が3年次6月の付属幼稚園教育実習後に同8月の保育所実習Aでは、4年制学生の方が経験を重ね、子どもとの関わりや、保育環境、保育者の役割などの捉えかたがより具体的になり学びが深まると推察される。4年制学生は、客観的に自己分析するとともに、理論について実習を通して考察したことが時間をかけ咀嚼され、自己肯定観に繋がっていると考えられる。また、同じ保育士登録資格ではあるが修業年限の違いから、4年制学生では実習の間にゆとりを保証できること。さらに、事後指導を十分



¹⁰ 平田美紀・當間左知子「実習園・養成校の連携を探る(4)ー保育所実習から保育実習Ⅱへの実習生を核にした実習の『深化』とはー」日本保育学会第62回論文集, p.390, 2009.

行うことにより経験からの学びを理論づける「間」が熟成され、人間性や協調性が培われる時間の確保が最大の強みになっていることが推察される。

5. まとめ ―事後指導の充実を図る手がかりとしての評価票の開発―

MS 評価票は、単一様式としていた本学独自の評価票と異なり、実習の段階性を意識して作成された「保育所実習A」と「保育所実習B」の項目の違いに大きな特徴がある。今回の研究で明らかになってきたことは、この段階性を意識させながらも学生によるその時点での「自己評価の視点」や「評価する力」に寄り添うことの重要性であり、実習を深化させていく上で事後指導の充実という課題である。

以下、事後指導のあり方を模索していく上で、学生の自己評価の充実に資するより機能的な評価様式を開発していく上で重要だと思われる3つのポイントを示したい。

1) 実習課題をより明確にできる評価様式の開発

結果と考察の部分で明らかにしてきたように、学生自身が保育士を目指す者としての自己課題をどれ

ほど明らかにできるかが、実習指導の最も重要な課題であると思われる。引き続き MS 的な視点を重視しながらも、学生自身の実習における学びの振り返りを促進させる仕組みと自己課題をより明確にできる評価様式の開発を目指したい。また、保育士への成長の歩みを段階的、かつ可視的に捉えることが可能となるような評価内容の設定を試みる必要がある。さらに、MS に示された内容に加えて、各養成校が独自に育むとしている資質への評価の可能性や妥当性の検証を継続的に実施していく必要もあろう。学生の学びの連続性に注目して、MS に提示されている小項目をまとめると表4のようになる。MS 評価項目の順序性を視覚的に意識した評価様式は、一連の実習の繋がりがりや自らの成長をより自覚できるものとなるのではないだろうか。

2) 実習施設と養成校をつなぐ「評価票」による協働

実習施設から、評価票の未記入項目や、評価を直接成績に反映しないしてほしいという要望があるなど、様々な受け止め方が評価票に現れている。また、養成校側には、実習施設ごとの評価基準の違い

表4. 保育所実習 A・B 記入様式改善案 (学びの連続性)

現行の評価項目		改善案	
保育所実習 A	保育所実習 B	保育所実習 A	保育所実習 B
①意欲・積極性	⑮意欲・積極性	①意欲・積極性	⑮意欲・積極性
②責任感	⑯責任感	②責任感	⑯責任感
③探究心	⑰探究心	③探究心	⑰探究心
④協調性	⑱協調性	④協調性	⑱協調性
⑤施設の理解	⑲保育技術の展開	⑦乳幼児の発達の理解	⑳一人一人の子どもへの対応
⑥一日の流れの理解	⑳一人一人の子どもへの対応	⑫子どもとのかかわり	
⑦乳幼児の発達の理解	㉑子どもの最善の利益	⑧保育計画・指導計画の理解	㉒指導計画立案と実施
⑧保育計画・指導計画の理解	㉒指導計画立案と実施	⑨保育技術の習得	⑲保育技術の展開
⑨保育技術の習得	㉓記録	⑩チームワークの理解	㉔チームワークの実践
⑩チームワークの理解	㉔保護者とのかかわり	⑪家庭・地域社会との連携	㉕地域社会との連携
⑪家庭・地域社会との連携	㉕地域社会との連携		㉔保護者とのかかわり
⑫子どもとのかかわり	㉖チームワークの実践	⑬保育士の倫理観	㉗保育士の職業倫理
⑬保育士の倫理観	㉗保育士の職業倫理		㉑子どもの最善の利益
⑭健康・安全への配慮	㉘自己課題の明確化	⑥一日の流れの理解	㉓記録
		⑤施設の理解	㉘自己課題の明確化
		⑭健康・安全への配慮	

から、成績にそのまま反映させることが困難な状況もある。養成校と実習施設との協働の中で、評価項目の精査を行う必要性があるといえる¹¹。園の方針、評価記入者の立場、同一規格で学生を比較する難しさなど教育的側面も踏まえる必要はあるが、「評価票」が学生にとって自己課題を見出し、実習施設と実習内容の理解が進む組織的かつ協働的な関係作りとなる項目構成を MS 評価票に期待したい。

3) MS 評価票での自己評価の今後の展望

同じ実習を本学独自の評価票と MS 評価票で自己評価を行うことで、それぞれの評価票の特徴が見いだされた。評価票の様式について、実習の経験を重ねると MS 様式を支持する捉えかたに変化していた。卒業後も引き続き MS 評価票の自己評価を続けることは、学生自身が課題を持って「学び続ける保育者」としての姿勢の涵養へとつながっていくであろう。また、MS 評価での 4 年制学生と 2 年制学生の自己評価比較から養成年限の違いを捉えられ、厚生労働省の標準的事項における養成年限に関する問題の明確化や再検討の必要性が考えられる。養成年限の違いと単一資格の問題に関して、現行のカリキュラムでは同じ実習評価票であるが、枠組みを変えず実習内容を量的に変える可能性や 2 年制学生、4 年制学生に見合った資格と職務内容や権限が処遇改善へと繋がる仕組みづくりも視野にいたした展望も重要な課題である。今後もさらに 4 年制学生の保

育所実習のあり方を研究したい。

(参考文献)

- ・山本裕詞・朴賢淑・安藤操里『2 年制保育士養成課程における新たな専門職性の視点—指導の健全育成ニーズに応える専門職養成の事例から—』東北大学大学院教育学研究科研究年報第 52 集, 第 2 号, pp.387-400, 2009。
- ・大嶋恭二「平成 18・19・20 年度厚生労働科学研究費補助金施策科学総合研究事業最終報告」2009。
- ・社団法人全国保育士養成協議会九州ブロック協議会「保育実習研究プロジェクト委員会」における取組み, 2009。
- ・大塚健樹・吉田恵子・斉藤修「教育実習保育実習における実習評価と自己評価の比較」盛岡大学短期大学部紀要第 11 号, pp19-23, 2001。
- ・加盟聡「保育実習における実習生の自己評価に関する考察—選択必修実習での保育所実習を例に—」新島学園短期大学紀要第 27 号, pp133-145, 2007。
- ・土谷由美子「保育実習に関する意欲と現状についてⅡ—学生のアンケートを中心に—」中国短期大研究紀要, 2008。
- ・水谷孝子『育ちの保育』八千代出版, 2009。
- ・厚生労働省「保育所保育指針」, 2008。

¹¹ 當間左知子・平田美紀「実習園・養成校の連携を探る (3)」日本保育学会第 62 回論文集, p.599, 2009。

巻末資料A

『保育実習Ⅰ』、『保育実習Ⅱ』、『保育実習Ⅲ』に関する「教科目の教授内容」

<p>【保育実習Ⅰ】 <科目名> 保育実習Ⅰ（実習・5単位） <目標> 1. 児童福祉施設の内容、機能等を実践現場での体験を通して理解させる。 2. 既習の教科全体の知識・技能を基礎とし、これらを総合的に実践する応用力を養う。 3. 保育士としての職業倫理と子どもの最善の利益の具体化について学ばせる。 <内容> 【保育実習指導（1単位）】 （ねらい） 保育実習を円滑に進めていくための知識・技術を習得し、学習内容・課題を明確化するとともに、実習体験を深化させる。 （内容） 1. 事前指導として学内において講義や視聴覚学習等を用いた演習を行い、また実習施設において見学・オリエンテーション等を行う。とりあげる内容は次の通りである。 (1) 保育実習の意義・目的・内容の理解。 (2) 保育実習の方法の理解。 (3) 実習の心構えの理解。特に個人のプライバシーの保護と守秘義務、子どもの人権尊重についての理解。 (4) 実習課題の明確化。 (5) 実習記録の意義・方法の理解。 (6) 実習施設の理解。 2. 実習中に巡回指導を行い、実習施設の実習指導担当者との連携のもとに、実習生へのスーパービジョンを行う。 3. 実習終了後に、事後指導として実習総括・評価を行い、新たな学習目標を明確化させる。 【保育所における実習（2単位）】 （ねらい） 保育所の生活に参加し、乳幼児への理解を深めるとともに、保育所の機能とそこでの保育士の職務について学ばせる。 （内容） 1. 実習施設について理解させる。 2. 保育の一日の流れを理解し、参加させる。 3. 子どもの観察や関わりを通して乳幼児の発達を理解させる。 4. 保育計画・指導計画を理解させる。 5. 生活や遊びなどの一部分を担当し、保育技術を習得させる。 6. 職員間の役割分担とチームワークについて理解させる。 7. 記録や保護者とのコミュニケーションなどを通して家庭・地域社会を理解させる。 8. 子どもの最善の利益を具体化する方法について学ばせる。 9. 保育士としての倫理を具体的に学ばせる。 10. 安全及び疾病予防への配慮について理解させる。</p>	<p>【保育実習Ⅱ】 <科目名> 保育実習Ⅱ（実習・2単位） <目標> 1. 保育所の保育を実際に実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得させる。 2. 家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、子育てを支援するために必要とされる能力を養う。 <内容> 1. 保育全般に参加し、保育技術を習得させる。 2. 子どもの個人差について理解し、対応方法を理解させる。特に発達の遅れや生活環境にともなう子どものニーズを理解し、その対応について学ばせる。 3. 指導計画を立案し、実際に実践させる。 4. 子どもの家族とのコミュニケーションの方法を、具体的に修得させる。 5. 地域社会に対する理解を深め、連携の方法について具体的に学ばせる。 6. 子どもの最善の利益への配慮を学ばせる。 7. 保育士としての職業倫理を理解させる。 8. 保育所の保育士に求められる資質・能力・技術に照らし合わせて、自己の課題を明確化させる。</p>
<p>【保育実習Ⅲ】 <科目名> 保育実習Ⅲ（実習・2単位） <目標> 1. 児童福祉施設(保育所以外)、その他社会福祉施設の養護を実際に実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得させる。 2. 家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、子育てを支援するために必要とされる能力を養う。 <内容> 1. 養護全般に参加し、養護技術を習得させる。 2. 子どもの個人差について理解し、対応方法を習得させる。特に発達の遅れや生活環境にともなう子どものニーズを理解し、その対応について学ばせる。 3. 援助計画を立案し、実際に実践させる。 4. 子どもの家族とのコミュニケーションの方法を、具体的に修得させる。 5. 地域社会に対する理解を深め、連携の方法について具体的に学ばせる。 6. 子どもの最善の利益を具体化する方法について学ばせる。 7. 保育士としての倫理を具体的に学ばせる。 8. 児童福祉施設等の保育士に求められる資質・能力・技術に照らし合わせて、自己の課題を明確化させる。</p>	<p>【保育実習Ⅳ】 <科目名> 保育実習Ⅳ（実習・2単位） <目標> 1. 児童福祉施設(保育所以外)、その他社会福祉施設の養護を実際に実践し、保育士として必要な資質・能力・技術を習得させる。 2. 家庭と地域の生活実態にふれて、子ども家庭福祉ニーズに対する理解力、判断力を養うとともに、子育てを支援するために必要とされる能力を養う。 <内容> 1. 養護全般に参加し、養護技術を習得させる。 2. 子どもの個人差について理解し、対応方法を習得させる。特に発達の遅れや生活環境にともなう子どものニーズを理解し、その対応について学ばせる。 3. 援助計画を立案し、実際に実践させる。 4. 子どもの家族とのコミュニケーションの方法を、具体的に修得させる。 5. 地域社会に対する理解を深め、連携の方法について具体的に学ばせる。 6. 子どもの最善の利益を具体化する方法について学ばせる。 7. 保育士としての倫理を具体的に学ばせる。 8. 児童福祉施設等の保育士に求められる資質・能力・技術に照らし合わせて、自己の課題を明確化させる。</p>

巻末資料B N大学独自の評価票「保育所実習〔A〕〔B〕」様式のサンプル

— 平成 年度 —
保育所実習〔A〕〔B〕評価票

保育所(園)名		保育所(園)長名	印
実習期間	平成 年 月 日～ 月 日	学籍番号	氏名

実習生の成績評点の御記入に際しては「評価の視点」を御参照のうえ、以下の各項目別に、「非常によい」「よい」「普通」「よくない」「非常によくない」、それぞれの欄の該当する番号に○印の御記入をお願い致します。

〔記入例〕

5	④	3	2	1
----- ----- ----- -----				
非常によい	よい	普通	よくない	非常によくない

評価の視点	評 価
1. 勤務態度に関して	5 4 3 2 1 ----- ----- ----- -----
2. 乳幼児に対する愛情と理解に関して	5 4 3 2 1 ----- ----- ----- -----
3. 研究の態度および教材研究に関して	5 4 3 2 1 ----- ----- ----- -----
4. 保育指導の実際に関して	5 4 3 2 1 ----- ----- ----- -----
5. 実習日誌に関して	5 4 3 2 1 ----- ----- ----- -----
6. 資質・適性に関して	5 4 3 2 1 ----- ----- ----- -----
出欠状況について	実習期間 () 日 早退 … () 回 出席 … () 日 遅刻 … () 回 欠席 … () 日
講 評	(先生の御意見、御要望等)

本評価票は、実習出席表とともに、実習終了後、御記入出来ましたら本学宛御送付下さいませようようお願い申し上げます。尚、保育所実習の評価は学生の実習日誌等の状況を加味して行いますが、目安としては、5段階評価で平均が2を下回る場合を「不可(失格)」、3を下回り2までを「可」、4を下回り3までを「良」、4以上を「優」とすることを考えておりますので、宜しく御願い申し上げます。

巻末資料C-1 N大学のMS評価票「保育所実習〔A〕」様式のサンプル

— 平成 21 年度 —

保育所実習〔A〕評価票

実習生の成績評点の御記入に際しては「実習生の評価について」を御参照のうえ、以下の各項目別に、「実習生として非常に優れている」「実習生として優れている」「実習生として適切である」「実習生として努力を要する」「実習生として多くの努力を要する」、それぞれの欄の該当する番号に○印の御記入をお願い致します。

(記入例) ⑤ 4 3 2 1
 実習生として非常に優れている 実習生として優れている 実習生として適切である 実習生として努力を要する 多くの努力を要する

実習生	第 学年	学籍番号	氏名		
施設名称				施設長 ⑤	
				指導担当職員 ⑤	
実習期間	平成 年 月 日 () ~	平成 年 月 日 ()	(合計 日間)		
勤務状況	出勤 日	欠勤 日	遅刻 回	早退 回	備考
項目	評価の内容	評 価			所 見
態 度	意欲・積極性	5 4 3 2 1			
	責 任 感	5 4 3 2 1			
	探 究 心	5 4 3 2 1			
	協 調 性	5 4 3 2 1			
知 識 技 能	施設の理解	5 4 3 2 1			
	一日の流れの理解	5 4 3 2 1			
	乳幼児の発達の理解	5 4 3 2 1			
	保育計画・指導計画の理解	5 4 3 2 1			
	保育技術の習得	5 4 3 2 1			
	チームワークの理解	5 4 3 2 1			
	家庭・地域社会との連携	5 4 3 2 1			
	子どもとのかかわり	5 4 3 2 1			
総合所見	保育士の倫理観	5 4 3 2 1			
	健康・安全への配慮	5 4 3 2 1			
		総合評価該当するものに○			実習生として A : 非常に優れている B : 優れている C : 適切である D : 努力を要する E : 多くの努力を要する

本評価票は、実習出席表とともに、実習終了後、御記入出来ましたら本学宛御送付下さいませようお願い申し上げます。尚、保育所実習の評価は学生の実習日誌等の状況を加味して行いますが、目安としましては、5段階評価で平均が2を下回る場合を「失格」、2.5を下回り2までを「不可」、3を下回り2.5までを「可」、4を下回り3までを「良」、4以上を「優」とすることを考えておりますので、宜しく御願い申し上げます。

巻末資料C-2 N大学のMS評価票「保育所実習〔B〕」様式サンプル

— 平成 21 年度 —

保育所実習〔B〕評価票

実習生の成績評点の御記入に際しては「実習生の評価について」を御参照のうえ、以下の各項目別に、「実習生として非常に優れている」「実習生として優れている」「実習生として適切である」「実習生として努力を要する」「実習生として多くの努力を要する」、それぞれの欄の該当する番号に○印の御記入をお願い致します。

(記入例) ⑤ 4 3 2 1
 実習生として非常に優れている 実習生として優れている 実習生として適切である 実習生として努力を要する 実習生として多くの努力を要する

実習生	第	学年	学籍番号	氏名					
施設名称				施設長 ㊦					
				指導担当職員 ㊦					
実習期間	平成 年 月 日() ~ 平成 年 月 日() (合計 日間)								
勤務状況	出勤	日	欠勤	日	遅刻	回	早退	回	備考
項目	評価の内容		評価					所見	
態 度	意欲・積極性		5	4	3	2	1		
	責任感		5	4	3	2	1		
	探究心		5	4	3	2	1		
	協調性		5	4	3	2	1		
知 識 技 能	保育技術の展開		5	4	3	2	1		
	一人一人の子どもへの対応		5	4	3	2	1		
	子どもの最善の利益		5	4	3	2	1		
	指導計画立案と実施		5	4	3	2	1		
	記録		5	4	3	2	1		
	保護者とのかかわり		5	4	3	2	1		
	地域社会との連携		5	4	3	2	1		
	チームワークの実践		5	4	3	2	1		
能	保育士の職業倫理		5	4	3	2	1		
	自己課題の明確化		5	4	3	2	1		
総合 所見							総合評価 該当するものに○	実習生として A： 非常に優れている B： 優れている C： 適切である D： 努力を要する E： 多くの努力を要する	

本評価票は、実習出席表とともに、実習終了後、御記入出来ましたら本学宛御送付下さいませようお願い申し上げます。尚、保育所実習の評価は学生の実習日誌等の状況を加味して行いますが、目安としましては、5段階評価で平均が2を下回る場合を「失格」、2.5を下回り2までを「不可」、3を下回り2.5までを「可」、4を下回り3までを「良」、4以上を「優」とすることを考えておりますので、宜しくお問い合わせ申し上げます。